## 読響創立55周年＆メシアン没後25周年記念

| | |
|---|---|
| 11.19［日］ | 第572回 定期演奏会<br>サントリーホール／14時開演<br>Subscription Concert, No. 572<br>Sunday, 19th November, 14:00 / Suntory Hall |
| 11.26［日］ | 第606回 名曲シリーズ<br>サントリーホール／14時開演<br>Popular Series, No. 606<br>Sunday, 26th November, 14:00 / Suntory Hall |
| 11.23［木・祝］ | 特別公演 メシアン／歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉<br>滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール／13時開演<br>※プログラムは「月刊オーケストラ」とは別のものを当日配布致します。 |

**指揮／シルヴァン・カンブルラン**（常任指揮者）
Principal Conductor　SYLVAIN CAMBRELING …… P. 4

**天使／エメーケ・バラート**（ソプラノ）　L'Ange　EMŐKE BARÁTH …… P. 5

**聖フランチェスコ／ヴァンサン・ル・テクシエ**（バリトン）
Saint François　VINCENT LE TEXIER …… P. 5

**重い皮膚病を患う人／ペーター・ブロンダー**（テノール）
Le Lépreux　PETER BRONDER …… P. 6

**兄弟レオーネ／フィリップ・アディス**（バリトン）　Frère Léon　PHILLIP ADDIS …… P. 6

**兄弟マッセオ／エド・ライオン**（テノール）　Frère Massée　ED LYON …… P. 7

**兄弟エリア／ジャン＝ノエル・ブリアン**（テノール）
Frère Élie　JEAN-NOËL BRIEND …… P. 7

**兄弟ベルナルド／妻屋秀和**（バス）　Frère Bernard　HIDEKAZU TSUMAYA …… P. 8

**兄弟シルヴェストロ／ジョン・ハオ**（バス）　Frère Sylvestre　ZHONG HAO …… P. 8

**兄弟ルフィーノ／畠山 茂**（バス）　Frère Rufin　SHIGERU HATAKEYAMA …… P. 8

**合唱／新国立劇場合唱団、びわ湖ホール声楽アンサンブル**
Chorus　NEW NATIONAL THEATRE CHORUS & BIWAKO HALL VOCAL ENSEMBLE …… P. 9

**合唱指揮／冨平恭平**　Chorusmaster　KYOHEI TOMIHIRA …… P.10

**オンド・マルトノ／ヴァレリー・アルトマン＝クラヴリー、大矢素子、小川 遥**
Ondes Martenot　VALÉRIE HARTMANN-CLAVERIE, MOTOKO OYA, HARUKA OGAWA …… P.10

**コンサートマスター／長原幸太**　Concertmaster　KOTA NAGAHARA

※当初発表時から出演者が一部変更されました。



## メシアン 歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉

（演奏会形式／全3幕／仏語上演、日本語字幕付き／全曲日本初演） …… P.14

MESSIAEN / Saint François d'Assise (concert style, Japan premiere)

### 第1幕 ［約75分］

第1景　十字架
第2景　賛歌
第3景　重い皮膚病患者への接吻

［休憩 Intermission　35分］

### 第2幕 ［約120分］

第4景　旅する天使
第5景　音楽を奏でる天使
第6景　鳥たちへの説教

［休憩 Intermission　35分］

### 第3幕 ［約65分］

第7景　聖痕
第8景　死と新生

合唱アシスタント（びわ湖ホール声楽アンサンブル）／大川修司
ソリスト稽古ピアニスト／江上菜々子、岡本佐紀子
合唱稽古ピアニスト／古瀬安子、矢田信子
字幕／野平多美　字幕操作／舞台字幕・映像 まくうち

※本著作物の上演使用は、全音楽譜出版社および Alphonse Leduc Éditions Musicales により許諾されています。

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ（11/19、26）
読売日本交響楽団、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）（11/19、26）
公益財団法人アフィニス文化財団（11/19、26）
「音楽文化の担い手としてのプロ・オーケストラが主催する、わが国ならびに各楽団が活動の重点を置いている地域にとって意義がある企画」として選ばれました。
芸術文化振興基金（11/23）
［協力］**アフラック**（11/19）
日本アルバン・ベルク協会、しがぎん経済文化センター（11/23）

Maestro of the month

# シルヴァン・カンブルラン

（常任指揮者）
Sylvain Cambreling

## メシアン畢生（ひっせい）のオペラ全曲日本初演に挑む

メシアン畢生の大作オペラ〈アッシジの聖フランチェスコ〉を、これまでに世界で一番多く指揮してきたマエストロが、念願だった日本での全曲初演に挑む。メシアンのスペシャリストである「色彩の魔術師」が、合唱を含め総勢240人という巨大編成を自在に操り、作曲家晩年の祈りにも似た高貴な精神の神髄に迫る。

1948年フランス・アミアン生まれ。これまでにブリュッセルのベルギー王立モネ歌劇場の音楽監督、フランクフルト歌劇場の音楽総監督、バーデンバーデン＆フライブルクSWR（南西ドイツ放送）響の首席指揮者を歴任し、現在はシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督とクラングフォーラム・ウィーンの首席客演指揮者を兼任する。また、巨匠セルジュ・チェリビダッケの後任として、ドイツ・マインツのヨハネス・グーテンベルク大学で指揮科の招聘（しょうへい）教授も務める。

客演指揮者としてはウィーン・フィル、ベルリン・フィルを始めとする欧米の一流楽団と共演しており、オペラ指揮者としてもザルツブルク音楽祭、メトロポリタン・オペラ、パリ・オペラ座などに数多く出演している。

録音にも積極的で、読響とは「幻想交響曲ほか」「ペトルーシュカほか」「第九」「春の祭典／中国の不思議な役人」「スコットランドほか」をリリースしている。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演





Artist of the month

©Zsofi Raffay

## 天使 エメーケ・バラート

L'Ange Emőke Baráth

ハンガリー生まれ。ピアノとハープを学んだ後、ブダペストのフランツ・リスト音楽院、続いてフィレンツェ音楽院で声楽を修めた。2011年にインスブルック・バロックオペラ国際声楽コンクールで第1位となり注目された。バロックオペラを得意とし、ハンガリー国立歌劇場、アムステルダム・コンセルトヘボウ、シャンゼリゼ劇場、エクサン・プロヴァンス音楽祭、ヴェルビエ音楽祭など多くの劇場、音楽祭から招かれている。これまでにモンテヴェルディ、ヘンデル、モーツァルト、ヴェルディなどのオペラに加え、宗教曲にも多数出演している。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

©DR

## 聖フランチェスコ ヴァンサン・ル・テクシエ

Saint François Vincent le Texier

1957年フランス生まれ。美術の学位を取得後、パリ・オペラ座で声楽を修めた。バロックから現代音楽まで幅広いレパートリーを誇り、歌唱と演技の両方に秀でたオペラ歌手として高い評価を得ている。これまでにパリ・オペラ座、シャンゼリゼ劇場、ブリュッセル・モネ劇場、アムステルダム・コンセルトヘボウ、サンフランシスコ・オペラなどに出演。ムーティ、チョン・ミョンフン、ミンコフスキ、ヤノフスキ、エッシェンバッハら一流指揮者と共演している。フランス歌曲とドイツ・リートにも定評があり、定期的にリサイタルを行っている。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

重い皮膚病を患う人 **ペーター・ブロンダー**

Le Lépreux Peter Bronder

イギリス生まれ。ロンドン王立音楽院で学んだ後、グラインドボーン音楽祭で本格デビュー。これまでにミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座、ベルリン国立歌劇場、メトロポリタン・オペラなど欧米の名門歌劇場で歌い、〈ジークフリート〉ミーメ、〈サロメ〉ヘロデ、〈さまよえるオランダ人〉エリックで大きな成功を収めた。ほかに〈ラ・ボエーム〉〈椿姫〉〈魔笛〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ばらの騎士〉など多数に出演。バレンボイム、ガーディナー、ハイティンク、レヴァイン、パッパーノなど一流指揮者と共演している。

◇11月19日、23日、26日 〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

©Kristin Hoebermann

兄弟レオーネ **フィリップ・アディス**

Frère Léon Phillip Addis

カナダのポートコルボーン生まれ。〈ドン・ジョヴァンニ〉題名役、〈セビリアの理髪師〉フィガロ、マルシュナー〈吸血鬼〉題名役のほか、ブリテン〈ビリー・バッド〉やサーリアホ〈遥かなる愛〉など近現代作品でも高い評価を得ている。これまでにパリ・オペラ座、ドレスデン国立歌劇場、ローマ歌劇場、カルロ・フェリーチェ劇場、カナディアン・オペラ・カンパニーなどで活躍。〈ペレアスとメリザンド〉ペレアス役を、カンブルランやナガノらの指揮でパリ・オペラ・コミック座、ハンブルク歌劇場、ルール・トリエンナーレで歌い、成功を収めた。

◇11月19日、23日、26日 〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

兄弟マッセオ **エド・ライオン**

Frère Massée Ed Lyon

1979年イギリスのヨークシャー生まれ。ケンブリッジ大学で美術史を学んだ後、ロンドン王立音楽院で声楽を修めた。古典派から現代までレパートリーは広く、これまでにロイヤル・オペラハウス、グラインドボーン音楽祭、エジンバラ音楽祭、バイエルン国立歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場、パリ・シャトレ座、エクサン・プロヴァンス音楽祭など欧州各地の歌劇場、音楽祭に出演。オーケストラではロンドン響、バーミンガム市響、ザルツブルク・モーツァルテウム管などに客演し、パッパーノ、クリスティ、ヤーコプス、ボルトンら一流指揮者と共演している。

◇11月19日、23日、26日 〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

兄弟エリア **ジャン=ノエル・ブリアン**

Frère Élie Jean-Noël Briend

フランスの新世代のリリック・テノールとして注目を集める逸材。2004年にストラスブール市立劇場でデビューし、06年にワイマール歌劇場と専属契約を結び、〈魔笛〉〈カルメン〉〈ナブッコ〉〈ラインの黄金〉などに出演した。特に〈ファウストの劫罰〉〈ホフマン物語〉の主役で高い評価を得ているほか、現代オペラにも積極的に取り組んでいる。これまでにシュトゥットガルト歌劇場、マドリード王立劇場、ボルドー国立オペラなどに出演している。カンブルランとはストラヴィンスキー〈結婚〉、シェーンベルク〈モーゼとアロン〉などで共演している。

◇11月19日、23日、26日 〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

兄弟ベルナルド **妻屋秀和**

Frère Bernard Hidekazu Tsumaya

東京芸術大学卒業、同大学院修了。イタリア留学を経て、1994年から2001年までライプツィヒ歌劇場、02年から11年までワイマール歌劇場の専属歌手として活躍。ライン・ドイツ・オペラ、ハノーファー州立歌劇場、ベルリン州立歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラなどにも客演し、深みのある歌声と重厚な演技で日本を代表するバスとしての名声を確立した。これまでに出演したオペラ公演は国内外合わせて800回を超える。第24回ジローオペラ賞、第3回ロシア歌曲賞受賞。二期会会員。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

兄弟シルヴェストロ **ジョン・ハオ**

Frère Sylvestre Zhong Hao

中国沈陽出身。中国中央オペラハウスにて活躍後、2005年来日。東京芸術大学大学院で学び、芸大オペラ〈ラ・ボエーム〉で日本デビュー。以降〈ドン・カルロ〉フィリッポ二世、〈魔笛〉ザラストロ等で好評を博す。第38回イタリア声楽コンコルソシエナ大賞受賞。二期会会員。

兄弟ルフィーノ **畠山 茂**

Frère Rufin Shigeru Hatakeyama

東京芸術大学卒業。同大学院修了後、文化庁派遣芸術家在外研修員としてミラノに留学。〈フィガロの結婚〉バルトロ、〈ドン・ジョヴァンニ〉レポレッロ、〈愛の妙薬〉ドゥルカマーラ、〈ラ・ボエーム〉コッリーネ等様々な役をこなし、高い評価を得ている。二期会会員。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演



合唱

## 新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

1997年にオープンした新国立劇場で、オペラ公演のための合唱団として活動を開始。現在、メンバーは100名を超え、新国立劇場の多彩な演目によりレパートリーを増やしつつある。高水準の歌唱力と演技力を有し、公演ごとに共演する出演者、指揮者、演出家から高い評価を得ている。読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉、ラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

合唱

## びわ湖ホール声楽アンサンブル

Chorus BIWAKO HALL Vocal Ensemble

全国からオーディションで選ばれた声楽家をメンバーとする、日本初の公共ホール専属の声楽家集団。びわ湖ホール独自の活動の中心的存在として、同ホール開館の1998年3月に設立された。ソリストとしての実力はもちろん、合唱の核となる優れた声楽アンサンブルとして注目を集めている。びわ湖ホールの自主公演への出演を主な活動とし、オペラ公演や定期公演を行うほか、全国各地で依頼公演を行っている。また、滋賀県内の学校を対象に、音楽普及活動にも積極的に取り組んでいる。2013年度第26回大津市文化賞受賞。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

合唱指揮 **冨平恭平**
Chorusmaster Kyohei Tomihira

東京生まれ。東京芸術大学卒業。指揮を高関健、田中良和、ピアノを迫昭嘉、秦はるひに師事。東京二期会、新国立劇場、藤原歌劇団、日生劇場などのオペラ公演で副指揮、合唱指揮などを務める。これまでに手掛けた作品は、〈フィガロの結婚〉〈セビリアの理髪師〉〈愛の妙薬〉〈椿姫〉〈ファルスタッフ〉〈パルジファル〉〈カルメン〉〈こうもり〉〈エフゲニー・オネーギン〉〈ペレアスとメリザンド〉〈ばらの騎士〉〈ルル〉〈夕鶴〉など多数。東京シティ・フィルや群馬響にも客演している。2010年から新国立劇場音楽スタッフ。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演

オンド・マルトノ **ヴァレリー・アルトマン=クラヴリー**
Ondes Martenot Valérie Hartmann-Claverie

パリ国立高等音楽院に学び、1973年にデビュー。ベルリン・フィル、ロンドン響、ボストン響、ニューヨーク・フィルなど世界の一流オーケストラと共演を重ねている。〈アッシジの聖フランチェスコ〉には初演から参加。

オンド・マルトノ **大矢素子**
Ondes Martenot Motoko Oya

イギリス生まれ。東京芸術大学在学中に原田節に学んだ後、渡仏し、パリ国立高等音楽院でV.アルトマン=クラヴリーに師事。帰国後は演奏だけでなく研究者としても活動し、レクチャーやテレビ・ラジオ出演などで広く知られる。

オンド・マルトノ **小川 遥**
Ondes Martenot Haruka Ogawa

神奈川県生まれ。15歳で渡仏、パリ国立高等音楽院でピアノ、室内楽を一等賞で卒業。その後オンド・マルトノをV.アルトマン=クラヴリーに師事し修士号を取得。フランス国内外のコンサートやフェスティバルで活躍中。

◇11月19日、23日、26日〈アッシジの聖フランチェスコ〉公演



| | |
|---|---|
| 12.2［土］ | 第201回 土曜マチネーシリーズ<br>東京芸術劇場コンサートホール／14時開演<br>Saturday Matinée Series, No. 201<br>Saturday, 2nd December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre |
| 12.3［日］ | 第201回 日曜マチネーシリーズ<br>東京芸術劇場コンサートホール／14時開演<br>Sunday Matinée Series, No. 201<br>Sunday, 3rd December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre |

**指揮／ディエゴ・マテウス** Conductor DIEGO MATHEUZ P.12
**ドラムス／ピーター・アースキン** Drums PETER ERSKINE P.13
**特別客演コンサートマスター／日下紗矢子**
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

バーンスタイン **〈キャンディード〉序曲**［約5分］ P.20
BERNSTEIN / “Candide” Overture

ターネジ **ドラムス協奏曲〈アースキン〉**（日本初演）［約30分］ P.21
TURNAGE / Concerto for Drum Set & Orchestra “Erskine” (Japan premiere)
Ⅰ. マヤとタイチの刻印
Ⅱ. ムッツィーのハバネラ
Ⅲ. アースキンのブルース
Ⅳ. フーガの熱狂

［休憩 Intermission］

ガーシュイン **パリのアメリカ人**［約16分］ P.22
GERSHWIN / An American in Paris

ラヴェル **ボレロ**［約13分］ P.23
RAVEL / Boléro

［主催］読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
［助成］文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
［事業提携］東京芸術劇場

文化庁

# ディエゴ・マテウス

Diego Matheuz

## 「エル・システマ」の俊英 読響に初登場

©Marco Caselli Nirmal

国際的に知られるベネズエラの音楽教育システム「エル・システマ」出身の俊英として、世界中から注目される若手が、読響に初登場。バーンスタイン、ガーシュイン、ラヴェルで腕を振るう。ドラムの達人アースキンとの共演にも注目だ。

1984年ベネズエラ生まれ。「エル・システマ」でヴァイオリンを始め、後に指揮を学ぶ。2008年にシモン・ボリバル・ユース・オーケストラ（現シモン・ボリバル響）を振って指揮者デビューを果たす。同年、アバドが設立したボローニャ・モーツァルト管の首席客演指揮者に抜擢された。その後、ローマ・サンタ・チェチーリア管、ミラノ・スカラ座フィルなどを指揮して声価を高めた。11年から15年までベネチア・フェニーチェ劇場の首席指揮者、13年から16年までメルボルン響の首席客演指揮者を務め、現在、シモン・ボリバル響副指揮者として、音楽監督のドゥダメルをサポートする。

これまでにフランス放送フィル、リヨン国立管、フィルハーモニア管、バーミンガム市響、ベルリン放送響、スイス・ロマンド管などに客演。オペラではフェニーチェ劇場で〈リゴレット〉〈椿姫〉〈ラ・ボエーム〉などを指揮したほか、バルセロナ・リセウ劇場で〈ドン・パスクァーレ〉、ベルリン国立歌劇場で〈セビリアの理髪師〉を振り、高い評価を得ている。

◇12月２日 土曜マチネーシリーズ
◇12月３日 日曜マチネーシリーズ



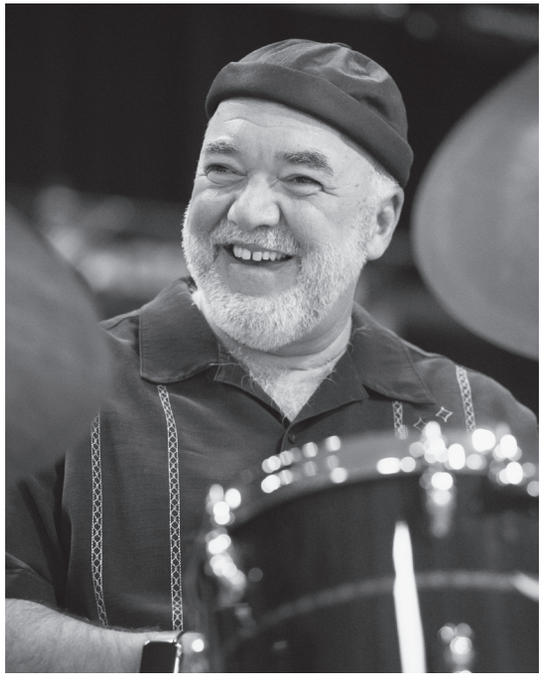


ドラムス

# ピーター・アースキン

Drums Peter Erskine

## ドラムの達人が初登場 協奏曲で腕前を披露



これまでに600以上のアルバムや映画音楽に出演し、グラミー賞を２度受賞するなど、世界的に著名なドラムス・パーカッションの達人が、読響に初登場。

1954年、米国ニュージャージー州生まれ。4歳からドラムスを演奏し、インディアナ大学でパーカッションを学ぶ。1972年、スタン・ケントン・オーケストラの一員としてプロ活動を開始。78年に「ウェザー・リポート」に加入。ジャコ・パストリアスと共に5枚のアルバムを発表し、アルバム「8:30」でグラミー賞を受賞した。ロサンゼルスでフレディ・ハバード、ジョー・ヘンダーソン、チック・コリアらと仕事をした後、ニューヨークに移り、「ステップス・アヘッド」で活躍。ソロアルバムの「Dr. Um」を含み過去8回のグラミー賞のノミネートを受けている。また、今年大ヒットした映画『ラ・ラ・ランド』の録音にも参加し、話題を呼んだ。

ソリストとしては、ベルリン・フィルやBBC響、フランクフルト放送響のほか、ロンドン、ロサンゼルス、シカゴ、オスロなど欧米各地のオーケストラに客演し、指揮者ではラトルやアンドリュー・デイヴィスらと共演を重ねている。また作曲家のターネジとは親しい関係にあり、2011年にロイヤル・オペラハウスで初演されたターネジのオペラ〈アンナ・ニコル〉にも出演した。今回の使用楽器はTAMA。

◇12月２日 土曜マチネーシリーズ
◇12月３日 日曜マチネーシリーズ

11.19［日］　11.26［日］　11.23［木・祝］

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

メシアン

# 歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉

**（演奏会形式／全3幕／仏語上演、日本語字幕付き／全曲日本初演）**

作曲：1975～1983年／初演：1983年11月28日、パリ／演奏時間：約5時間半（休憩含）

## あらすじ

MESSIAEN
Saint François d'Assise

**第1幕　第1景『十字架』**

舞台は13世紀イタリア。フランチェスコと兄弟（修道士）レオーネが歩いている。フランチェスコはレオーネに「完全な歓び」について説く。それは十字架を受け入れること、すなわちキリストへの愛のためには、キリストの十字架での苦難を思い、世の中のあらゆる矛盾や苦しみ、非難に耐えなければならず、それを甘受することが「完全な歓び」である、という。二人が立ち去った後、巨大な十字架が浮かぶ。

**第2景『賛歌』**

早朝のミサでフランチェスコは3人の修道士たちとともに神を賛美し、その創造物を讃（たた）える（「太陽の賛歌」の一節）。その後ひとり残ったフランチェスコは、神に祈りを捧げ、重い皮膚病患者に出会うことを願い、その人を愛することができるようにしてほしいと神に祈る。

**第3景『重い皮膚病患者への接吻』**

フランチェスコはアッシジ近くの療養所を訪れ、病苦から神と世界を呪っている重い皮膚病患者と出会う。初めはこの男の姿に躊躇（ちゅうちょ）するが、フランチェスコは彼の近くに座り、慰めの言葉をかける。すると窓辺に天使が現れ（フランチェスコと患者にその姿は見えない）、「神はあなたの心より大きい」と告げる。フランチェスコはこの言葉に勇気づけられ、患者に口づけする。男の病はすぐさま快癒し、男は「奇跡だ！」と叫び、喜んで踊り出す。フランチェスコは、神が自分の心にもたらしてくれた自己克服力と恩恵の大きさに感謝し、聖フランチェスコとなる。

**第2幕　第4景『旅する天使』**

ヴェルナ山の修道院に向かう森の小道を、旅人に姿を変えた天使がやってくる。修道院の扉を猛烈な音でたたくと、兄弟マッセオが扉を開けて天使を招き入れる。天使は兄弟エリアに神の摂理について問いかけるが、エリアは答えるのを拒み、天使を追い出してしまう。再び天使がやってきて同じように扉をたたき、今度は兄弟ベルナルドに同じ問いをする。博学なベルナルドはそれに答え、天使と死後の生について議論する。天使が去った後、ベルナルドとマッセオは、「あれは天使だったのでは……」と顔を見合わせる。

**第5景『音楽を奏でる天使』**

天使は聖フランチェスコのもとにも現れる。彼はすぐに気づき、天使は音楽の力と神秘について語りかける。天使の奏でるヴィオール（弦楽器）の音楽は、聖フランチェスコに天上の至福を予感させ、その音色のあまりの美しさに気を失う。修道士たちが次々とやってきて「神父さまの身に何か起こったのでは」と心配するが、やがて聖フランチェスコは目を覚まし、静かに語り始める。

**第6景『鳥たちへの説教』**

春のアッシジの森。世界中からたくさんの鳥たちが集まる。鳥たちの言葉を理解できる聖フランチェスコは、兄弟マッセオとともに庭に立ち、鳥たちに説教し祝福を与える。すると鳥たちは声を合わせて一斉に歌い出し、「鳥たちのコンサート」が始まる。

**第3幕　第7景『聖痕』**

夜のヴェルナの森。聖フランチェスコが岩場の洞窟にひとりでいると、そこに巨大な十字架が出現する。その十字架から放たれる5本の光線によって、両手と両足と右脇腹が照らされ、キリストと同じ五つの傷を負う。それはキリストの聖痕であり、聖フランチェスコがキリストの受難をわが身に受けることのできる聖人であることを示す神のしるしでもあった。

**第8景『死と新生』**

死を前にした聖フランチェスコが横たわり、その周りを修道士たちが取り囲む。聖フランチェスコは自分が愛したすべてのものに別れを告げ、「太陽の賛歌」の最後の一節を歌い、修道士は「詩篇141番」で応える。そこに天使と重い皮膚病患者も現れ、聖フランチェスコを力づける。天使が現れたことで天国が約束された。「主よ、音楽と詩が私を御身のもとに近づかせてくれました……」と最後の言葉を述べて息を引き取り、鐘が盛大に鳴り響く。やがて合唱が復活を賛美し、一条の光が聖フランチェスコが先程まで横たわっていたところを照らし、まばゆいばかりに輝く。

## 音楽の聴きどころ

MESSIAEN
Saint François d'Assise

20世紀を代表するフランスの作曲家オリヴィエ・メシアン（1908〜92）は、唯一のオペラ〈アッシジの聖フランチェスコ〉を、長年奉職したパリ音楽院を定年退職した後、8年の歳月をかけて完成させた。若き日は教会のオルガニストとして活躍し、ジョリヴェらと作曲家グループ「若きフランス」を結成。第二次世界大戦勃発で動員され捕虜になるが、釈放されると自らの作曲の方法をまとめた『わが音楽語法』（1944）を刊行した。独特の旋法（「移調の限られた旋法」）やリズム書法、和声法をもとに、自分の愛好する鳥の歌や共感覚者としての色彩感覚を音楽に取り入れ、豊かな音響世界を開いた。熱心なカトリック信者でもあり、カトリシズムと結び付いた作品も少なくない。〈アッシジの聖フランチェスコ〉は、彼のそれまでのあらゆる手法と美学が注ぎ込まれた大作である。

### 作曲の経緯

1971年、パリ・オペラ座の総支配人ロルフ・リーバーマンは、当時低迷していたオペラ座を復活させるためメシアンに新作オペラの作曲を依頼した。メシアンは最初固辞したものの、ポンピドゥー大統領から直々の依頼もあって、その仕事を引き受けた。まずは台本の作成に着手する。初めはキリストの受難と復活の物語を描くことも考えたが、中世イタリアの最も誉れ高い聖人で、フランチェスコ会創始者として知られるアッシジの聖フランチェスコ（1182〜1226）を題材に選んだ。ただ聖フランチェスコの生涯を物語として追うのではなく、皮膚病患者への奇跡、鳥たちへの説教、聖痕、昇天といった、この聖人を特徴づける八つの情景を取り上げ、3幕8景のフランス語の台本を完成させた。聖フランチェスコが死の床で編み、美しい詩と讃（たた）えられた「太陽の賛歌」や、聖フランチェスコをめぐる逸話をまとめた『小さき花』等からの引用、聖書の言葉も借用した（「聖ヨハネの第一の書」）。台本執筆は数か月で終えたが、作曲に4年、オーケストレーションと総譜の作成にさらに4年ほどかかった。

作曲は、台本どおりの順番ではなく、第4景『旅する天使』から始まった。それから第2景『賛歌』、第3景『重い皮膚病患者への接吻』と順番に進み、第5景『音楽を奏でる天使』、第7景『聖痕』が作曲された。そして第1景『十字架』、第8景『死と新生』と続き、聖フランチェスコの生涯で最も有名なエピソードを描く第6景『鳥たちへの説教』は、最後に作曲された。



オーケストラは巨大で破格の楽器編成をとる。フルート7本（ピッコロ、アルト含む）をはじめ多数の管楽器、ジオフォン（大地の擬音）とエオリフォン（風の擬音）を含む多種多様な打楽器群、5種類の鍵盤打楽器、3台のオンド・マルトノなどが目をひく。特殊奏法を総動員し、オーケストラのパレットから輝かしく色彩的な音響が作り出され、鳥たちの歌声が満ち溢れる。

### 鳥類学者メシアン

メシアンは数々の作品で、世界各地の鳥の歌を取り入れている。鳥の声への関心は学生時代からもっていたが、自ら鳥類学者と名乗るほどのめり込んでいったのは、1950年代以降である。実業家で鳥類学者のドラマンに鳥の鳴き声を聴き分ける方法を教わり、彼とともにフランス各地を訪れ、鳥の歌の収集と分類、分析などを行った。そして〈鳥たちの目覚め〉（1953）から本格的に鳥たちの歌を用いるようになり、〈鳥のカタログ〉（1956〜58）や〈異国の鳥たち〉（1955〜56）など、鳥たちの歌が次々と作品に現れた。さらにフランス国内のみならず、演奏旅行に出かけた先で世界中の鳥たちの声を集めていく。1962年の初来日の際も、軽井沢を訪れ、鳥の鳴き声を採譜した。「フランスの鳥であれば50種類の鳥の声を簡単に聴き分けることができます」と語るが、なかでもメシアンが愛したのは、ウタツグミとヒバリの声で、この2種類のフランスの鳥は、多くの作品で用いられた。

〈アッシジ〉にもたくさんの鳥の歌が出てくる。メシアンは、オペラの作曲にあたってアッシジや、さらに遠いニューカレドニアまで出かけ、様々な鳥の鳴き声を採譜した。〈アッシジ〉はヒバリの声で幕を開け、高音で囀（さえず）るジェリゴーヌ（ムシクイの一種）はニューカレドニアで発見した鳥だ。最も長大な第6景（第2幕）の「鳥たちのコンサート」では、まばゆい光を放ちながら、万華鏡のように色とりどりの鳥たちの歌が響き渡る。

### 上演について

オペラは当初の予定より完成が遅れたが、1983年11月28日にパリ・オペラ座（ガルニエ）で小澤征爾の指揮、サンドロ・セークイの演出で初演された。そして1992年8月にザルツブルク音楽祭において、音楽祭総監督ジェラール・モルティエのもと、ピーター・セラーズの演出、エサ＝ペッカ・サロネンの指揮で9年ぶりに舞台上演された。年末に同じ演出の舞台がパリ・オペラ座（バスティーユ）でかかり、このときの指揮者がカンブルランであった。以来、マエストロはたびたび取り上げ、世界で最も多くこの作品を指揮

している。なお、日本では1986年に小澤指揮の新日本フィルによって第3、7、8景のみが初演され、今回が全曲日本初演となる。

## 音楽的特徴

〈アッシジ〉は、オペラとはいえ、音楽的導入はあるものの序曲はもたず、間奏曲もない。歌唱は朗唱に近く、アリアや劇的な重唱なども含まない。

メシアンは、登場人物や事象に主題を与えた。彼によって15種類の主題（モチーフのような小さなものも）が示されているが、それらはそのまま用いるだけでなく、反復され、変形される。なかでも全曲を通じて何度も現れる「聖フランチェスコの主題」は、最初と最後、そして中央に特徴的な増4度下行音程を含むため耳に残りやすい。

**第1幕　第1景『十字架』**（やや生き生きと）　ヒバリの声を模した鍵盤打楽器の乾いた音色で始まる。レオーネが歌う「レオーネの主題」も、増4度下行音程の反復。フランチェスコが語り出すと弦楽器が「聖フランチェスコの主題」で支える。ここではヒバリの声と二つの主題が繰り返される。さらに「完全な歓びの主題」も現れ、最後は力強い合唱で結ばれる。

**第2景『賛歌』**（やや遅く）　チューブラーベルの響きを含む和音の連続が繰り返される導入の後、「聖フランチェスコの主題」が現れる。クロウタドリの歌を挟んでフランチェスコが「太陽の賛歌」の一節を歌い、嬰（えい）ハ音のみの3人の修道士と男声合唱が続く。ここまでが3回繰り返され、今度はニワムシクイの歌と輝かしい合唱の交替となる。皮膚病患者に会うことを願う「決意の主題」は、2オクターヴ下行の強烈な響きで、鳥の歌とともに繰り返され、最後もこの主題が反復される。

**第3景『重い皮膚病患者への接吻』**（十分に中庸な速さで）　オンド・マルトノとクラリネット、コントラバスによる導入は病の恐怖を暗示し、ホルンとチューバによるフクロウが鳴く。「皮膚病患者の主題」は低音からすばやく駆け上がり、その姿に驚くフランチェスコは、全楽器の巨大なクラスター（隣接した音程の密集した音響）で表される。「完全な歓びの主題」を経て、二人の対話が続き、十字架について語るとき「荘厳さの主題」が響く。やがて天使が歌う清らかな「天使の主題」が現れる。患者の苦悩は合唱のクラスターで立ち上るが、長い全休止後、病が癒える奇跡が起こる。鐘が鳴り響き、イソヒヨドリの歓喜の歌が始まる。

**第2幕　第4景『旅する天使』**（やや生き生きと）　導入の音楽で4人の修道士の性格が鳥たちの歌とともに描かれる。歌謡的な「レオーネの主題」、穏やかに揺れ動く「マッセオの主題」が続いて現れる。ニューカレドニアの鳥「ジェリゴーヌの主題」はピッコロで模写され、天使の到来を告げる。強烈なリズムの反復は「天使が扉を叩く主題」。修道士と天使の対話が続き、天使が去った後、ジェリゴーヌの鳴き声だけが残る。

**第5景『音楽を奏でる天使』**（十分中庸な速さで）　聖フランチェスコは、クロウタドリやウタツグミとともに「太陽の賛歌」を歌う。ジェリゴーヌとチョウゲンボウの鳴き声とともに天使が近づき、「真理の主題」で話しかける。オンド・マルトノのかすかな音色の「天使のヴィオールの主題」が合唱に支えられて広がる。その響きは森を揺さぶり、再びヴィオールの主題が現れ、沈黙へと導く。修道士たちの主題が鳥たちの歌とともに戻ってくる。

**第6景『鳥たちへの説教』**（やや生き生きと）　鍵盤打楽器のヒバリが歌い始めると、クラリネットのヤドリギツグミや日本のウグイスなど複数の鳥の声が入る。マッセオと聖フランチェスコの対話にも様々な鳥たちの声が絡まる。「カビネラ（ズグロムシクイ）の主題」もそのひとつ。そして複雑なリズムをもつ無数の鳥たちの大合唱となる。

**第3幕　第7景『聖痕』**（十分中庸な速さで）　暗闇の場面。木管楽器の下行音型にハミングの合唱が重なり、アオバズクの鳴き声が恐怖を呼び起こす。聖フランチェスコは聖痕を望み、合唱がキリストの声となる。巨大なクレッシェンドの後、沈黙となり、天使が扉を叩いたときと同じリズムで和音が4回繰り返される。5回目は合唱のクラスターによる叫び声で再び沈黙となる。穏やかで輝かしい合唱で結ばれる。

**第8景『死と新生』**（非常に中庸な速さで）　メシアンによれば、最終景は第2景の音楽的拡大である。短い導入を経て、聖フランチェスコは「太陽の賛歌」で別れを告げ、修道士たちは「詩篇141番」を唱える。ジェリゴーヌの鳴き声が天使の到来を告げる。「音楽と詩が……」で「聖フランチェスコの死の主題」が始まり、合唱のクラスターを含む激烈な響きを経て聖フランチェスコは息絶える。レオーネの嘆きの歌が終わると音楽は明るさに包まれ、ヒバリが賑やかに囀り、輝きに満ちた響きの持続で終結する。

---

楽器編成／フルート3、ピッコロ3、アルトフルート、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、エスクラリネット2、バスクラリネット、コントラバスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン6、トランペット3、ピッコロトランペット、トロンボーン4、チューバ3、打楽器（シロフォン、シロリンバ、マリンバ、グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、チューブラーベル、クラベス、エオリフォン、トライアングル、木魚、シンバル、サスペンデッド・シンバル、ウッドブロック、ムチ、マラカス、レコレコ、グラス・チャイム、シェル・チャイム、ウッド・チャイム、タンブリン、ゴング、クロタル、トムトム、銅鑼、サンダーシート、ジオフォン、小太鼓、大太鼓）、オンド・マルトノ3、弦五部、独唱、合唱

12.2［土］ 12.3［日］

柴田克彦（しばた かつひこ）・音楽ライター

バーンスタイン

## 〈キャンディード〉序曲

作曲：1955～56年／初演：1956年12月1日（ミュージカル版）、
1957年1月26日（フル編成版）、ニューヨーク／演奏時間：約5分

来年生誕100年を迎えるレナード・バーンスタイン（1918～90）は、アメリカ最大のスター指揮者にして、作曲家、ピアニスト、テレビ解説者、著述家としても活躍した超人的音楽家。作曲家としては、何と言ってもミュージカル〈ウエスト・サイド・ストーリー〉で知られているが、没後は、交響曲第2番〈不安の時代〉などシリアスな作品も多く取り上げられている。

〈キャンディード〉は、コミック・オペラ風のミュージカル。〈ウエスト・サイド・ストーリー〉が世に出る1年前の1956年に初演された。18世紀フランスの哲学者ヴォルテールの風刺小説を原作とした本編は、楽天的な若者キャンディード（無邪気な人、お坊ちゃん等の意味）が恋人クネゴンデを探して世界を遍歴する破天荒な物語。当初はあまり成功しなかったが、1973年の新版や、バーンスタイン自身による1989年の演奏会形式の上演を契機に復権著しい。

コンサートで頻繁に単独演奏されている序曲は、本編初演時の好評に伴って、作曲者自身が小編成のミュージカル版をフル編成に編曲したもの。劇中の旋律を用いた快速調の賑（にぎ）やかな音楽で、アメリカの管弦楽曲の中でも最上位の人気を得ている。曲は、ファンファーレ風に始まり、めまぐるしい主題が躍動しながら軽快に進行。やがてキャンディードとクネゴンデの二重唱“幸せな私たち”が流麗に奏される。それらの主題が交錯後、コロラトゥーラの超絶技巧で知られるクネゴンデのアリア“着飾ってきらびやかに”を用いた急速な終結部に至る。

本日の公演は全体に打楽器がクローズアップされており、この曲も、冒頭をはじめ随所で効果を上げるティンパニや小太鼓、シロフォンなど様々な楽器が活躍する。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、中太鼓、シロフォン、グロッケンシュピール）、ハープ、弦五部



ターネジ

## ドラムス協奏曲〈アースキン〉（日本初演）

作曲：2013年／初演：2013年11月9日、ボン／演奏時間：約30分

現代イギリスを代表する作曲家の一人、マーク＝アンソニー・ターネジ（1960～）は、1989年にラトル指揮／バーミンガム市響が初演した〈3人の叫ぶ教皇〉で国際的評価を獲得。同楽団やBBC響、ロンドン・フィル、シカゴ響のコンポーザー・イン・レジデンス等を務めたほか、ジャズにも傾倒し、ボーダーレスな創作活動を行っている。また、2016年のサントリーホール30周年記念作品〈Hibiki〉でも話題を集めた。

本作は2013年、本日演奏するドラム界のレジェンド、ピーター・アースキンのために書かれた作品。同年11月、ドイツのボンのベートーヴェン・ハレで、彼のソロとステファン・ブルニエ指揮／ボン・ベートーヴェン管によって初演された。アースキンは、1996年の〈Blood on the Floor〉の世界初演に参加するなど、ターネジと20年来の交流があり、またターネジは、彼と打楽器奏者のエヴェリン・グレニーのために二重協奏曲も作曲している。

曲は、当然ジャズ寄りの明快な作風が特徴。変拍子を多用しながら、クールでノリの良い音楽が展開される。ラテン・パーカッションをはじめとするオーケストラの打楽器も活躍し、サクソフォンやピアノ、ベースギターも彩りを添加。全4楽章から成り、第1～3楽章には、アースキンの家族（妻は日本人）の名が付されている。

**第1楽章「マヤとタイチの刻印」**：♩＝96　タイトルは、アースキンの娘と息子の名。後打ちのリズムと変拍子が特徴的な心地よい音楽で、最後に1分半～2分のカデンツァ（ドラム・ソロ）が置かれている。

**第2楽章「ムッツィーのハバネラ」**：優しくリズミカルに。♩＝120　ムッツィーはムツコ夫人の愛称。ヴァイオリンに始まる様々な楽器のソロをまじえて、エキゾティックに進行する。

**第3楽章「アースキンのブルース」**：ベル（Bell）のようなブルース。♩＝44　激しく始まり、緊迫感を湛（たた）えた音楽が続く。

**第4楽章「フーガの熱狂」**：♩＝120　ドラムと打楽器陣のコラボの後、複雑なフーガが展開。1分～1分半のカデンツァを挟んで、熱狂的に突き進む。

楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、サクソフォン3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、打楽器（グロッケンシュピール、ヴィブラフォン、ムチ、マリンバ、カウベル、タンブリン、ウッドブロック、クラベス、コンガ、コング、マラカス、トムトム、ティンバレス、ボンゴ）、ハープ、ピアノ、ベースギター、弦五部、独奏ドラムス

ガーシュイン

# パリのアメリカ人

作曲：1928年／初演：1928年12月13日、ニューヨーク／演奏時間：約16分

ポピュラーとクラシックの双方で20世紀前半のアメリカを代表する作曲家ジョージ・ガーシュイン（1898～1937）は、1924年に発表した〈ラプソディ・イン・ブルー〉で、“シンフォニック・ジャズ”と呼ばれる新ジャンルを開拓。翌年には〈ヘ調の協奏曲〉で成功を収めた。そして、1926年に休養を兼ねてパリを訪問。まだ管弦楽法に不慣れだった彼は、ラヴェルやストラヴィンスキーに教わる意志を持っていたものの、彼らが友人として接したため、結果的に独自の道を歩むことになる。

本作は、このパリ滞在中に着想され、タクシー・ラッパ（クラクション。彼はこれを持ち帰っている）からもインスピレーションを得た。だが、多忙で創作ははかどらず、1928年1月にようやく本格的な作曲を開始。3～5月に再びパリを訪れて雰囲気を味わい、8月にピアノ・スコアを完成した。さらに3か月半でオーケストレーションを完成。12月にカーネギー・ホールで初演された。

作曲者初の純粋管弦楽作品である本作の手稿には、あえて「ガーシュイン：作曲および管弦楽化」と記されており、そこに〈ラプソディ・イン・ブルー〉の編曲はグローフェに託していた彼の管弦楽法の急速な進歩と自信がうかがえる。

曲は、パリの活気と喧噪（けんそう）をアメリカ人旅行者の目線で描いた交響詩的な性格をもつ。作曲者自身は「パリの街を散策するアメリカ人の郷愁を基調にした作品」と述べている。ジャズやポピュラー系の旋律を多数用いながら、変化に富んだ音楽が生き生きと展開。全体に自由な構成がなされているが、大きく急－緩－急の3部分に分けられる。

軽快なフランス風の「散歩の主題」で始まる。シャンゼリゼ通りを歩くアメリカ人旅行者が表され、車のクラクション（多くの打楽器が活躍するが、中でもこの楽器の使用が特徴的だ）やダンスホールから流れる流行歌などをまじえて、大都市の雑踏が描かれる。しかし、ヴァイオリンの優美な旋律をきっかけに故郷への郷愁が募り、テンポを落としてブルース調の切ない音楽が流れる。やがてチャールストンの旋律が登場。活気が戻り、各旋律が交錯しながらフィナーレに至る。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、アルトサクソフォン、テナーサクソフォン、バリトンサクソフォン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、トムトム、ウッドブロック、クラクション、シロフォン、グロッケンシュピール）、チェレスタ、弦五部



ラヴェル

# ボレロ

作曲：1928年／初演：1928年11月22日、パリ／演奏時間：約13分

フランス近代音楽をリードしたモーリス・ラヴェル（1875～1937）の代表作のひとつ。“管弦楽の魔術師”と呼ばれた彼の面目躍如たる、ユニークな1曲だ。もともとは、舞踊家イダ・ルビンシテインの依頼で書かれた、ラヴェル最後のバレエ音楽。1928年7～10月に作曲され、11月にパリ・オペラ座で初演された。つまり〈パリのアメリカ人〉と全く同時期の作品である。ちなみに、ラヴェルの方も1928年1～4月にアメリカを訪れ、ガーシュインにも会っている。本日後半は、この2曲の比較も妙味だ。

バレエ自体は、スペインの小さな酒場で若い女性がボレロを踊り、最後は全員が熱狂していく……といった内容。ただ、1930年1月にラヴェルの指揮で演奏会形式による初演が行われて以来、管弦楽曲として世界的な人気を獲得した。なお、ボレロはスペインの3拍子系の民俗舞曲だが、本作はそのテイストを用いたもので、リズムやテンポは本来の舞曲とは異なっている。

曲は、2小節のリズム・パターンが169回反復される中、ラヴェル自身が述べた「スペイン＝アラビア風」の二つの主題が交互に繰り返されるだけという、異例なほどシンプルな構成がとられている。主題の展開は行われず、調性も終結近くの一瞬を除いてハ長調のまま。変化は、管楽器を中心にリレーされ、多様にブレンドされていく楽器用法と、*pp*から*ff*に至る曲全体のクレッシェンドによってもたらされる。

打楽器に光を当てた本日は、ひたすら同じリズムを刻み続ける小太鼓（最終場面は2台で演奏。最後の2小節のみ解放される）に、いつも以上の熱視線を注ぎたいところ。もちろんフルートに始まる各奏者のソロは聴きものだし（特に出だしが超高音のトロンボーン）、途中現れる多調効果（チェレスタとホルンがハ長調、ピッコロ1がホ長調、ピッコロ2がト長調で奏し、不思議なズレ感覚をもたらす）や、それまでの原則を変えて転調した後、なだれ込むように終わる最後の部分なども、重要なポイントとなる。ただ、音色変化の妙と、反復しながら音が増大していく生理的な快感に、身を預けるべき作品ともいえるだろう。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（オーボエ・ダモーレ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ソプラノサクソフォン、テナーサクソフォン、ホルン4、ピッコロトランペット、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部